

コリント人への手紙第二7章 「慰めと喜びの知らせ」

1A コリント人たちへの呼びかけ 1-4

1B 霊肉の清め 1

2B パウロたちに対する信頼 2-4

2A コリント人たちの熱意 5-16

1B テトスから来た慰め 5-7

2B 一時的な悲しみ 8-10

3B 証明された潔白 11-12

4B 真実であった信頼 13-16

本文

コリント人への手紙第二7章を見ていきます。私たちは、ようやく、パウロが元の話に戻るところを見ます。覚えていますか、2章で、コリントにパウロの手紙を持っていったテトスに、トロアスで会う約束をしていたところ、そこにテトスが来なかった話を読みました。それでパウロ派、不安な心を抱えたまま、ギリシア北部のマケドニアに向かいました。第二次宣教旅行で、マケドニア人の夢を見て旅立った道と同じです。船に乗って、ピリピに行きましたね。それからテサロニケ、次にベレアでした。そこがマケドニアのところですよ。

1A コリント人たちへの呼びかけ 1-4

その話をしてから、2章14節からは、いわば脱線していました。パウロが、自分の心をできるだけ開いて、自分に対する信頼や確信が揺らいでいるコリントの人たちに対して、自分の福音の対する務めを弁明していったのです。そして、これが7章の4節まで続きます。その弁明の最後の部分です。私たちが心をこれだけ開いています、あなたがたを信頼しています。あなたがたも、心を開いてくださいと呼びかけています。

1B 霊肉の清め 1

¹ 愛する者たち。このような約束を与えられているのですから、肉と霊の一切の汚れから自分をきよめ、神を恐れつつ聖さを全うしようではありませんか。

7章は、6章のそのままの続きです。「このような約束」と言っていますが、6章の最後に出てくる、パウロの、旧約聖書からの引用です。引用といっても、イザヤ書などにある、いくつかの預言から、言い換えているものです。

そこには、私たちが神の宮であって、その中に神がおられるのだから、不信者が持っている汚

れから離れなさいという呼びかけであります。そうすれば、神が受け入れてくださり、神が父となり、私たちは息子であり娘となるというものであります。コリントの教会の中には、不信者の汚れが、性の乱れという肉の汚れもありました。偶像という霊の汚れもありました。そういったものから自分たちが離れて、それで、神を父とし、神から息子、娘とみなされる、親しい交わりができるのだよ、という呼びかけを行っています。

「神を恐れつつ」と言っていますね。これは、神を畏れ敬うという意味でのことです。神が自分に罰をあたえることを恐れるということではありません。そうではなく、むしろ愛する神の心を、自分が汚れの中に入ることによって傷つけることを恐れるのです。自分が神から傷を受けるというのは、自己中心的ですが、愛の関係に入っているならば、自分が神に傷を与えることを恐れるはずですよ。

そして、「聖さを全うしようではありませんか」と言っています。主との親しい交わりにおいて、自分を聖くしていることは条件になっています。イエス様が、「マタ 5:8 心のきよい人は幸いです。その人たちは神を見るからです。」と言われました。ヘブル人への手紙にも、「すべての人との平和を追い求め、また、聖さを追い求めなさい。聖さがなければ、だれも主を見ることはできません。」とあります(12:14)。いつも、主の前に出て行って、御霊によって、また御言葉によって心を清めていただくことが必要です。そうすることによって、私たちは神を父としてあがめ、また神から子どもとして受け入れられている交わりを楽しむことができます。

2B パウロたちに対する信頼 2-4

² 私たちに対して心を開いてください。私たちはだれにも不正をしたことがなく、だれも滅ぼしたことがなく、だれからもだまし取ったことはありません。

次に呼びかけているのが、「心を開いてください」ということです。これも、前回からの話の続きです。「Ⅱコリ 6:12-13 あなたがたに対する私たちの愛の心は、狭くはなりません。むしろ、あなたがたの思いの中で狭くなっているのです。13 私は子どもたちに語るように言います。私たちと同じように、あなたがたも心を広くしてください。」彼らはパウロが、彼らに対して心を狭くしていると思っていました、そうではなく、彼らのほうが思いの中で心が狭くなっていました。以前の訳では、「窮屈にしている」と訳されていました。見た目ではパウロたちのことを判断していたからです。

そして疑っていて、不正をパウロたちが働いたとか、誰かをつまずかせて滅ぼしたとか、だまし取ったとか思っていたのですが、それは彼らがそう思い込んでいるだけでした。似たようなことを言った指導者がいます。預言者サムエルです。彼の働きを退けて、周りの国々のように王を立ててほしいと、イスラエルの民が要求しました。まるで、彼がとてつもなく悪いことをしたから、退けるかのように退けたのです。それで、主はサムエルに、サウルを立てるように示されました。サウルが立てられて、自分自身が表舞台から退く時に、このように言っています。「Ⅰサム 12:3 さあ今、

【主】と主に油注がれた者の前で、私を訴えなさい。私はだれかの牛を取っただろうか。だれかのろばを取っただろうか。だれかを虐げ、だれかを打ちたたいたであろうか。だれかの手から賄賂を受け取って自分の目をくらましたであろうか。もしそうなら、あなたがたにお返しする。」

しばしば、教会において、指導者に対する感情のもつれで、その指導者がことさらに罪にあたるようなことを行っていないのに、あたかも行っているかのように退けようとするのが起こります。私たちは、自分たちの集まりが誰がかしらになっているのかという人間の集まりではなく、神が立てられた集まりなのだ、人ではなくキリストなのだということを見つめて行かないといけません。

³ 私はあなたがたを責めるために言っているわけではありません。前にも言ったように、あなたがたは、私たちとともに死に、ともに生きるために、私たちの心のうちにあるのです。

パウロは、しっかりと物事をはっきりとさせるために語っていますが、それは彼らのことを責めたいからではありません。そうではなく、イエスのいのちが自分たちに働き、イエスの死と共に働いているということを、パウロたちが前に言いましたが、それは、コリントの人たちも同じなのだ、ということです。キリストのからだとして、一つになっており、イエスの死といのちを共に体験しているのだ、ということです。私たちは、個人主義に陥ってはいけませんね。自分がイエス様を知るだけでなく、キリストのからだとして、共にイエス様を知っていくのです。

⁴ 私には、あなたがたに対する大きな確信があり、あなたがたについて大きな誇りがあります。私は慰めに満たされ、どんな苦難にあっても喜びに満ちあふれています。

これは、「大きな信頼」と言ってもいいでしょう。主にあって、コリントの人たちのことは大丈夫という確信があるのです。そして、大いに誇ってもいます。彼らのことで良いことを聞くならば、とても慰められます。彼らとのつながりがあるからこそ、苦難があっても喜びに満ち溢れています。これほど、コリントの人々とのつながりが、パウロを励ましていたのです。私たちも、キリストのからだとして一つになっているところに、主の慰めがあり、また喜びがあるのです。

2A コリント人たちの熱意 5-16

1B テトスから来た慰め 5-7

⁵ マケドニアに着いたとき、私たちの身には全く安らぎがなく、あらゆることで苦しんでいました。外には戦いが、内には恐れがありました。

パウロが、全く安らぎがありませんでした。外には戦い、というのは、アジアで死ぬような思いをした苦難について、1章でパウロが語っていました。そして、「内には恐れ」というのは、パウロの先のコリント訪問、そしてその後で送った手紙です。どちらも、コリント人への第一の手紙と、この第

の手紙の間のことです。彼が厳しい処置を指示したために、愛するコリントの人々の間に大きな動揺が走ったようです。彼の真意や意図が伝わったのかどうか？すごく気がかりでした。

⁶しかし、気落ちした者を慰めてくださる神は、テスが来たことで私たちを慰めてくださいました。⁷テスが来たことだけでなく、彼があなたがたから受けた慰めによっても、私たちは慰められました。私を慕うあなたがたの思い、あなたがたの深い悲しみ、私に対する熱意を知らされて、私はますます喜びにあふれました。

すばらしいですね。私たちの神は、「気落ちした者を慰めてくださる」方です。今、私たちが気落ちしているのであれば、私たちには、気落ちした者を慰めてくださる方がおられるのだということを知る必要があります。

パウロは、二つのことで慰められました。愛する兄弟であり、同労者であるテスが、コリントから戻って来て、マケドニアでパウロに会うことができたことです。テスとは、テスへの手紙のテスのことです。パウロとて、肉なる人間です。同労者、仲間がいることがどれだけ慰めになることでしょうか。私たちも、互いに互いを必要としています。次に、コリントの人々が、パウロの前の手紙に、パウロが意図したとおりに反応していることを知ったことです。これで深い慰めを得ました。

彼らに、パウロが自分たちのことをとても慕っていることが、きちんと伝わったようです。そして、彼らは、コリントにある不正の問題があることを認識し、深い悲しみを抱きました。そして、目を覚ましたというか、主に真剣に取り組まなければいけないという熱意が生まれたのです。パウロは、これから「熱意」について話していきます。

2B 一時的な悲しみ 8-10

⁸あの手紙によってあなたがたを悲しませたとしても、私は後悔していません。あの手紙が一時的にでも、あなたがたを悲しませたことを知っています。それで後悔したとしても、⁹今は喜んでいきます。あなたがたが悲しんだからではなく、悲しんで悔い改めたからです。あなたがたは神のみこころに添って悲しんだので、私たちから何の害も受けなかったのです。

前に送った手紙は、先ほど言いましたように、第一の手紙の後に送ったものです。聖書には残っていません。この手紙によって、コリントの人々を悲しませました。けれども、それは悔い改めへと至らせたのであるから、神のみこころに添った悲しみだったのです。罪に対する悲しみであり、そうであるならば、あなたがたは害を受けなかったと言っています。

ヤコブが、手紙の中で悲しみなさいと勧めている箇所があります。それは、清められるためであり、神の恵みを受けるためです。「ヤコブ 4:8-10 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがた

に近づいてくださいます。罪人たち、手をきよめなさい。二心の者たち、心を清めなさい。9 嘆きなさい。悲しみなさい。泣きなさい。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えなさい。10 主の御前でへりくだりなさい。そうすれば、主があなたがたを高く上げてくださいます。」罪を罪とみなすことで、それで悲しむことによって、主が深い慰めを与えてくださいます。

¹⁰ 神のみこころに添った悲しみは、後悔のない、救いに至る悔い改めを生じさせますが、世の悲しみは死をもたらします。

午前礼拝でここからお話ししましたので、聞いてない方はぜひ聞いてください。後悔と悔い改めの違いを話しています。また神に添った悲しみと、世の悲しみの違いも話しています。

「救い」とは何かを思い出さないといけません。罪からの救いです。状況からの救いではなく、罪からの救いです。罪からの救いのために、肉体が滅ぼされることもあるとも、パウロは、第一の手紙で話していました。その近親相姦の罪を犯している男について、話しています。「I コリ 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」肉が滅ぼされても、もしそれが霊の救いのためならば、通らなければいけないものなのです。同じように、主の晩餐のことについて、こう話しました。「11:32 私たちがさばかれるとすれば、それは、この世とともにさばきを下されることがないように、主によって懲らしめられる、ということなのです。」裁かれることがあっても、それは世と共に裁かれることのないように、つまり、主の来られる日に世が裁かれますが、その時には救われるために、今、懲らしめを受けるのです。なぜ、肉が滅ぼされたり、懲らしめを受けるのか？そうすることによって、罪を罪として悲しみ、罪を憎み、罪を捨てることができるようにするためです。

教会における、またキリスト者間の問題について、神に対する罪だけでなく、社会的にも、また法的にも罪を犯している時に、どうすればよいのか、何が必要なのかを、思い悩むことがあります。家庭内暴力をふるまっている人はどうするのか？脅迫や恐喝の罪は？詐欺罪を犯している人はどうするのか？キリスト者として、そのような罪を犯しうるし、実際に犯している事例はあります。その時に、被害者は赦すことができます。キリスト者であれば、赦す選択と自由があります。けれども、本人が本当の意味で立ち直るには、警察のお世話にならなければいけない時もあります。知恵が必要ですね。その知恵の一つが、悲しむべき状況に入っても、みこころにそった悲しみを持っているならば、悔い改めに至るのであれば、それは益となる、ということです。

3B 証明された潔白 11-12

¹¹ 見なさい。神のみこころに添って悲しむこと、そのことが、あなたがたに、どれほどの熱心をもたらしたことでしょう。そればかりか、どれほどの弁明、憤り、恐れ、慕う思い、熱意、処罰をもたらしたことでしょう。あの問題について、あなたがたは、自分たちがすべての点で潔白であることを証

明しました。

悲しみの中で、彼らは神に立ちかえりました。彼らが行なったことは、まず弁明です。これは、何が問題であるかを明らかにすることです。問題をあやふやにしないではっきりさせることです。次に憤りです。自分たちがしてしまったことに対して、憤りを持ちます。罪に対する憤りを持ちます。そして恐れです。神に対する恐れを持ちます。そして慕う思いです。これは主のみこころを求めるために、主を慕う思いです。そして、熱意です。主に従っていきたいという熱意です。これらをとおして、コリント人は潔白であること、証明しました。

¹²ですから、私はあなたがたに手紙を書きましたが、それは不正を行った人のためでも、その被害者のためでもなく、私たちに対するあなたがたの熱心が、あなたがたのために神の御前に明らかにされるためだったのです。

結局、不正を行った人やその被害者のためではなく、主がパウロの手紙を用いて、コリントの教会を目覚めさせ、主に対して熱心になることを明らかにさせることができました。

主に対する熱心がなくなる時があります。その多くは、人の犯している罪です。それが、淫らな行いであるとかであると、当人たちだけの問題とみられがちです。けれども、パウロは、第一の手紙で、「5:6 わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。」と言いました。つまり、個人がしていることが全体に広がっていくのです。私たちは、自分の身体に対して行っていることは、自分のことだけで他の人たちには迷惑をかけていないと思いますが、絶対に違います。周りの人々、愛している人々に伝わります。キリストのからだであれば、なおさらのこと、広がっていくのです。

それは、霊的には生ぬるさであり、鈍さになります。主についてのことに、愛情が、熱心がなくなります。ヨシュア記の、アカンのことを思い出してください。アカンは、エリコの聖絶すべきものから、貪って自分の天幕に盗っていきました。すると、次のアイの攻略では、全軍ではなく、一部の者たちだけ行けばよいでしょう、みなを煩わせる必要はないという、高ぶりと漫然の態度になっていました。そしてヨシュアも、主に求めることなく、それを許したのです。もう、アカンの罪が全体に広がっていたのです。霊的な鈍感さ、無感覚をもたらしていました。

結果は燦燦たるもので、イスラエル軍が敗退したのです。それで、ヨシュアが嘆いて祈りました。なぜ、エジプトからここまで連れて来たのか？と。ここで滅ぼすために連れて来たのか？と嘆いたのです。まるで、荒野の民の不満のようです。けれども、主はその祈りを全く聞かれませんでした。そして、アカンの罪を明かされたのです。それから、主に対する熱心が戻りました。アカンの罪を取り除いた後、アイの攻略は、主が指示されるように動いて行ったのです。それは、エリコのような

華々しいものではありません。おびき寄せ作戦であり、普通の攻略、地味なものです。しかし、ヨシユアたちには主に対する熱心があったので、成功したのです。

そうした熱心さを取り戻すべく、前に出ていくのは勇気が要ります。モアブの草原で、イスラエルの宿営に、モアブの娘たちが入ってきました。イスラエルの男たちは彼女たちと淫らなことを始めました。そして娘たちの神々を拝んだのです。主は、この罪に対して激しい怒りを燃やされました。そこで、その怒りを代弁した人が、祭司ピネハスでした。公然と、自分の天幕にミディアン人の女を連れてきました。それでピネハスは、天幕に入って、その二人を腹を指して殺したのです。そうすると、主の罰がやみました。もし、彼が殺さなければ、イスラエルの民全体が滅んでしまうかもしれないという、危機的なものでした。

イエス様は、ラオディキアにある教会に対して、こうした悔い改めが必要であることを教えられましたね。彼らは霊的に生ぬるくなっていました。それで、こう言われています。「黙3:19 わたしは愛する者をみな、叱ったり懲らしめたりする。だから熱心になって悔い改めなさい。」熱心に悔い改めると、主が彼らと食事を取ってくださるという約束があります。そうです、主との交わりが回復するのです。ここコリントの教会も、神の宮として、悔い改めることにより、神を父とし、神が彼らを息子、娘として下さる交わりが回復するのです。

4B 真実であった信頼 13-16

¹³ こういうわけで、私たちは慰めを受けました。この慰めの上にテトスの喜びが加わって、私たちはなおいっそう喜びました。テトスの心が、あなたがたすべてによって安らいでいたからです。

テトス自身が、とても喜んでいたので。彼はとてもコリントの教会のことを案じていたのでしょう。彼は、コリントの人たちが正しく反応しているのを見て、彼もとても安らいだのです。

¹⁴ 私はテトスに、あなたがたのことを少しばかり誇りましたが、そのことで恥をかかずにすみません。むしろ、私たちがあなたがたに語ったことがすべて真実であったように、テトスの前で誇ったことも真実となったのです。

パウロは、テトスにコリントの教会のことを良く話していました。それが、まるで違う状況であったなら、恥をかいていたでしょうが、そうならなかったのです。パウロがコリントの教会を誇っていたことが、事実、そうであったことが明らかになりました。

¹⁵ テトスは、あなたがたがみな従順で、どのように恐れおののきながら自分を迎えてくれたかを思い起こし、あなたがたへの愛情をますます深めています。

コリントの人たちは、テトスを迎え入れる時に、神に立てられた人として、テトスの言っていることに従順でありました。そして恐れおののきながら、と言っていますが、これは怖がっているのではなく、大きな敬意を払っているということです。パウロの前の手紙は、とても厳しい処置であったのにもかかわらず、彼らはそれを真剣に受け止めたのです。そのことをパウロが聞き、ますます愛情を深めたのです。

¹⁶ 私はすべてのことにおいて、あなたがたに信頼を寄せることができることを喜んでいます。

パウロは、信頼の回復ができるのかどうか悩んでいましたが、この良い結果を聞いて、今、全幅の信頼を寄せられることを知り、大変喜んでいます。

これで、コリントの教会全体については、問題が解決しました。けれども、一部にパウロに敵対している分子がいます。それは、偽使徒たちに付いている少数の者たちです。10章以降、パウロは、その使徒と自称している者たちが何をしているのかを暴いていきます。その前に、8章と9章で、テトスが、問題に対処すること以外に行ったこと、それはエルサレムのユダヤ人の教会への支援金を集めることについて話していきます。